このスポット・おすすめ!

オムライス、パスタ、ステーキから
メインディッシュが選べる

洋食館 C'cœur（ククール）

洋風の邸宅で特別なひとときを
3月は伊江淳氏の個展を開催

フレンチの流れをくむ正統派洋食店が、昨年7月にうるま市役所東棟の前にオープンしました。人気のランチは、メインディッシュがオムライス、パスタ、ステーキの3種類から選べるコース仕立てになっており、しかも週替わりで味付けが変わるので、訪れる度に新たな味が楽しめます。季節の野菜をふんだんに使い、見た目も鮮やかな前菜盛り合わせには、テイクアウトでも大好評のキッシュが付いてきます。

「料理人として"おいしさ"を追求するのはもちろんですが、それ以上に、お客様と同じ目線に立って、皆さんが好きな料理を提供したいという気持ちが強いんです。"これ好きでしょ、食べてよ!"という気分で、毎日一生懸命作っています」とはオーナーシェフの新里順さん。糖度の高いトマトを契約農家から仕入れたり、ベーコンを自家製にしてみたり、素材を丁寧に吟味しながら、「調味料やスパイスは最小限に抑え、どの料理もだしをしっかり取る」のがこの店のおいしさの秘けつ。パンやデザートも新里さんが手作りしています。

「洋食館」の名前の通り、まるで映画に出てくるコーロッパの邸宅のような、落ち着いたインテリアも魅力的です。また3月1日からは、現代美術家・伊江淳さんの個展を開催します。「開店以来、初めての試み。今後は定期的に、食事をしながら楽しめるいろいろなイベントを開催していきたいですね」と新里さん。さっそく4月29日には、プロのオペラ歌手を招いたミニライブが開かれる予定です。

住所 / うるま市みどり町 2-8-1 1F
電話 /098-923-3244
時間 /ランチ 11:30～15:30(L.O.14:30)
ディナー 18:00～23:00(L.O.21:00)
休み / 日曜日、第 1 月曜日
駐車 /6～8 台

〈おもなメニュー〉
ランチ 1,300円～1,600円
今日のメインディッシュ(オムライス、パスタ、ステーキから選択)、前菜盛り合わせ、自家製パン、ティーまたはコーヒー
※自家製デザートの盛り合わせはプラス 300円
ディナー 1,590円～2,590円
今日のメインディッシュ(オムライス、パスタ、魚料理、肉料理、スペシャルから選択)、前菜盛り合わせ、自家製パン、ティーまたはコーヒー
※自家製デザートの盛り合わせはプラス 400円

なぞなぞに 読者 答えて ワイワイ広場

☺❖プレゼント❖☺

このスポット・おすすめコーナーで紹介の『 洋食館 C'cœur（ククール） 』で使える

ランチメニュー〈ペア〉お食事券 3組様

Q なぞなぞ
食べると安心するケーキはなーんだ?

ヒント
安心すると気持ちがホッとするよね!

2月号当選者 前号の答え〈②ヒマラヤ〉

おめでとうございます!
★仲宗根 卓さん(沖縄市在住)
★名嘉山 武さん(読谷村在住)
★安里 永子さん(那覇市在住)

読者プレゼント応募方法

切手 はがき 904-0303
読谷村字伊良皆237-1
ウインズ
『広報誌係』
①住所 ②氏名
③年齢 ④職業
⑤電話番号

裏

⑥なぞなぞの答え
⑦ご意見・ご感想

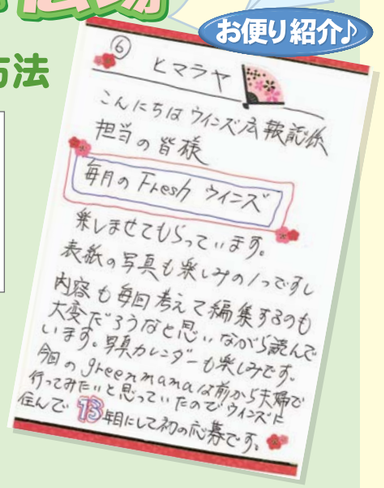
宛先

応募者の中から抽選で、
読者プレゼントを進呈致します。
どしどしご応募下さい!

締め切り
2017年3月20日消印有効
「当選者は次号(Vol.151)にて発表致します」

『Freshウインズ』は、建築でお手伝いをさせて頂いた施主様をはじめ、地域にお住まいの方など、ご縁をいただいた皆様に配布致しております。諸事情により配布不要となった際は大変お手数ですが、その旨ご連絡下さい。(ウインズ広報誌係)

お便り紹介♪


⑥ ヒマラヤ
こんにちは ウインズ広報誌係
担当の皆様
毎月のFresh ウインズ
楽しませてもらっています。
表紙の写真も楽しみの1つですし
内容も毎回考えて編集するのも
大変だろうなと思いながら読んで
います。暦カレンダーも楽しみです。
毎回のgreenamanaは前から夫婦で
行ってみたいと思っていたのでウインズに
住んで13年目にして初の応募です。

Fresh（フレッシュ） ウインズ

人と人とのつながりを大切に…。池原建設が大切なお客様にお送りする手作り広報誌

Fresh Winds
2017年 3月号
Vol.150

(株)池原建設 企画事業部ウインズ
〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆 237-1
営業時間 / 9:00～18:00 (年末年始を除く)
住宅のメンテナンスや補修等のご相談は、お気軽にスタッフへお声掛け下さい!
0120-229-512 ウインズ 池原建設 検索

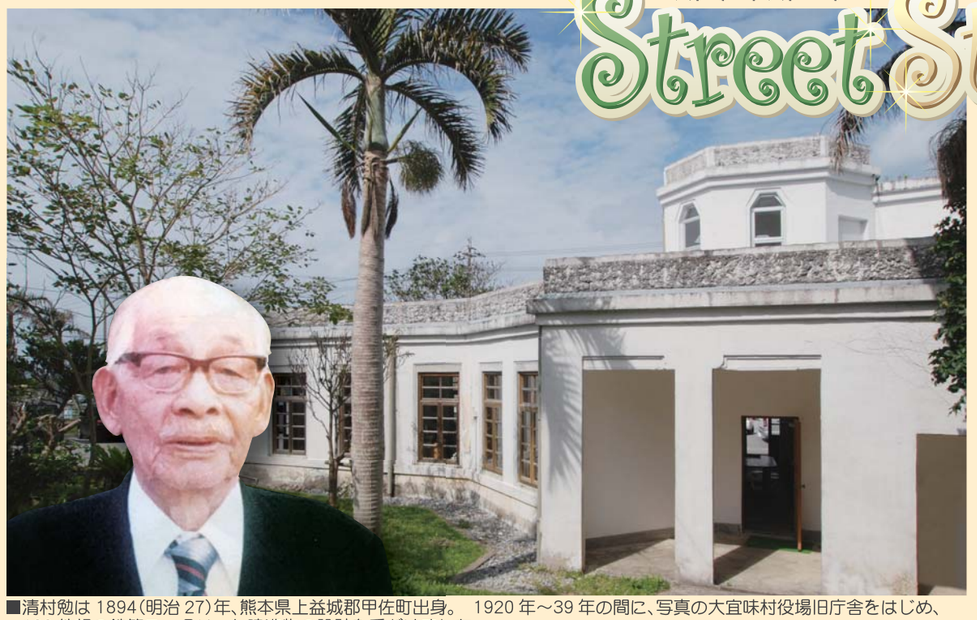
今月の歳時記

3月3日(金)～20日(月)	**第35回 東村つつじ祭り** 会場・開催地／東村村民の森つつじ園
3月4日(土)	**第25回 ゆかる日まさる日さんしんの日** 会場・開催地／読谷村文化センター鳳ホール
3月11日(土)・12日(日)	**第22回 読谷村文化協会 文化祭** 会場・開催地／読谷村文化センター
3月18日(土)～20日(月)	**第24回 おきなわ全島やちむん市** 会場・開催地／恩納村・ホテルムーンビーチ屋内展示場

日に日にうららかな陽気へと向かう3月。下旬には県内各地のビーチから海開きの知らせも届き始めます。
3月4日の「三線の日」にちなんで始まったイベント「ゆかる日まさる日さんしんの日」も今年で25回目。読谷村文化センターを主会場に、県内・県外・海外ではたくさんの三線愛好家が、時報に合わせて「かぎやで風」を演奏します。

ストリートストーリー
Street Story!

小説『風に立つ石塔』執筆のきっかけは40年前の「出合い」
大宜味村役場旧庁舎の設計者・清村勉が残した功績を伝える


■清村勉は 1894（明治 27）年、熊本県上益城郡甲佐町出身。 1920 年～39 年の間に、写真の大宜味村役場旧庁舎をはじめ、100 件超の鉄筋コンクリート建造物の設計を手がけました

沖縄に現存する最古の鉄筋コンクリート建造物として知られる「大宜味村役場旧庁舎」。木造建築が主流だった時代に、当時では珍しかった鉄筋コンクリート造を採用し、設計を手がけたのは、国頭郡役所の建築技手だった清村勉という人物でした。その清村の足跡を記した『風に立つ石塔』の著者、国梓（くにし）としひでさんに話を聞きました。

国梓としひでさん

突如現れた洋風の建物にあぜんとした20代の記憶

沖縄市出身の作家、国梓としひでさんが著した小説『風に立つ石塔』は、昨年10月に国の重要文化財（建造物）への登録が決まった（※）「大宜味村役場旧庁舎」の設計者、清村勉の人物伝です。沖縄建設新聞紙面で2015年4月1日から翌16年3月16日まで連載された記事に一部加筆・修正して、昨年8月に出版されました。

「連載の話を受けたのは14年の暮れ。編集者からは“恋愛小説でも何でも、テーマは国梓さんにお任せしますよ”と言われたのですが、読者層を考えると、さすがにラブストーリーは難しい（笑）。それじゃあ誰か、沖縄の建築家を取り上げた評伝を書いてみようかと下調べを始めたときに、ふと思い当たったのが、大宜味村役場旧庁舎だったんです」と国梓さんは振り返ります。

とはいえ、退職するまで、国家公務員として農業専門の道を歩んできた国梓さんにとって、建築土木は未知の世界。なぜ旧庁舎の存在がひらめいたのかといえば、その鍵は約40年前、社会人の駆け出し時代までさかのぼります。大宜味村大兼久にあった法務局の登記所に、仕事で出かけたときのこと。ひと休みしようと裏山へ向かう脇道に入った瞬間、白いコンクリート造りの洋風の建物が目の前に現れました。

「あぜんとしました。市街地からこんなに遠く離れた人目のつかない場所に、こんなに洒落た建物があるなんて。やんばる一帯は（琉球大学の）学生時代に何度も歩き回ったはずなのに…」。

周囲にいた人に話を聞き、数年前まで役場として使われていたことや、今は別の用途で利用されていることなどは、すぐに知ることができました。しかし、いつ、どうして建てられたのかは、結局分からないまま。間もなく本土での赴任生活が始まると、興味の接点も完全に途切れ、以後は一度として意識に上ることさえありませんでした。それが連載の話をきっかけに、封印されていた記憶が40年ぶりによみがえったのです。

■出版から 2 カ月後の昨年 10 月に、重要文化財（建造物）に指定するよう国の文化審議会の答申が発表されました

■現在の旧庁舎内。清村や大宜味大工に関する資料も閲覧できます

■昨年 8 月に出版された『風に立つ石塔』。一般書店でも購入できます

人物に魅せられ、沖縄・九州のゆかりの地を訪ね歩く

小説の手がかりを得ようと国梓さんは、さっそく大宜味村役場旧庁舎を訪問しました。その結果、旧庁舎は1925年に完成した沖縄県最初期の鉄筋コンクリート造建築で、現存する最も古い建物であることが判明。そして設計を手がけたのが、国頭郡役所建築技手をしていた熊本県出身の清村勉という人物であることが分かりました。

「大正時代なぜ熊本から沖縄に？」。当時は道路も未舗装で、那覇から国頭までの移動には客馬車で丸一日かかるような時代。不思議に思いながらもさらに調べていくと、國場幸太郎、大城鎌吉、金城賢勇、金城平三、大城龍太郎ら、沖縄建築界の黎明期を築いた名だたる名士と深い交流があったことを知り、「間違いなく面白い内容になりそうだ」と編集者を説得しました。

ただ一つだけ、執筆を始めるにあたって気がかりだったのが「かなりの取材が必要になる」ことでした。国梓さんは2007年に新沖縄文学賞、10年に農民文学賞を受賞するなど、その筆力には絶大な定評があったとはいえ、「今までの作品は完全な創作。今回のような伝記的小説は初めてで、しかも建築という専門的な分野。どこまで掘り下げて書けるだろうか」と一抹の不安も感じていました。

しかし、いざ準備に取りかかると、そのような心配はどこへやら。探究心の赴くままに、フットワーク軽く県内外を奔走し、清村にゆかりのある九州の土地を度々訪問していました。出生地であり大工見習として働き始めた熊本県上益城郡甲佐町、20歳で実業学校へ進学し学生時代を過ごした熊本市、徒弟学校の代用教員として赴任し鉄筋コンクリートの工法を初めて知り、妻の曽木ナルとも出合った鹿児島県姶良市加治木町。もちろん大宜味村役場旧庁舎は幾度となく訪ね、建物の構造・工法を詳しく調査するとともに、清村と縁のある建築関係者にも聞き取りを重ね、情報を収集。連載開始以降も執筆の合間を縫って、取材に飛び回る毎日が続きました。

■清村が設計した建造物の一つ、金武小学校。1924 年に沖縄県最初の鉄筋コンクリート校舎として竣工されました

異境の沖縄で粛々と仕事をこなす建築家としての価値を再評価

「書き続けていくうちに、私自身が清村の魅力にすっかりはまっていきました。すごくおこがましいことですが、この連載を書かせるために清村が私を呼び寄せたのではないか、そんなことを考えることもありました」。

国梓さんは自身の境遇を清村に重ね合わせて、次のようにも評しています。

「私は大学を卒業してから15年余り、東京の官庁をはじめ、全国を飛び回っていました。その間、常に心の片隅では、いつか何らかの形で沖縄に貢献したいという思いを抱いていました。一方で清村はどうだったでしょう。彼は1920年に勤務地の（鹿児島県）加治木を離れて、沖縄へやって来ました。しかも新婚直後にもかかわらず、当時はインフラも不十分だった山原（やんばる）という土地にもかかわらず、です。赴任後は故郷の熊本に錦を飾りたいとの思いもあったかもしれませんが、自分に課せられた仕事を粛々とこなし、結果として沖縄の建築界に多大な功績を残してくれました」。

1939年に帰郷するまで、清村が設計を手がけた鉄筋コンクリート造の建築は、大宜味村役場を含め、確認できる記録だけでも100件超を数えます。国梓さんは著書のあとがきで、「実は、彼は建築の王道や大局を歩んだ建築史に名を残すほどの人物だったのではないか」とも記しています。

清村勉という名前は今までも、大宜味村役場旧庁舎の設計者として、一部の人たちには知られていましたが、それが著書が出版されたことで、多くの県民の方々に認知されることになるでしょう。

■著書を読むと改めて、清村の功績の偉大さに気付かされます

清村勉とはどんな人物だったのか、大宜味村役場旧庁舎はどのようにして設計されたのか、その実像は国梓さんの著書に委ねましょう。読後に改めて周囲の景色を見渡すと、当たり前に建つ鉄筋コンクリート造の建物が、私たちの生活文化を支えてきた意義深いものとして目に映るかもしれません。

※近日中に官報告示を経て、正式に登録有形文化財（建造物）の指定を受ける見込みです